

---

# 昏い道連れ

洸海

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

昏い道連れ

### 【Zコード】

Z4558Y

### 【作者名】

洮海

### 【あらすじ】

妖退治を生業とする流れ者の雷火は、雨宿りに選んだ木陰で一人の少年と出会う。神官戦士になるために必要な「しるし」探しの途中だという彼と、ひとまず共に行くことにする雷火。だが少年の背後には、ひつそりとついて来る不吉な昏い影があつた。和風異世界ファンタジー。サイトにはダウンロード版のみ有。残酷描写はたまに少しあるだけで、タグを付けるか付けまいか悩むレベルです。

## — 雨宿り (1) (前書き)

上代と室町だか江戸だかをじりぢりにしたよつな、なんぢやつてジヤパーズファンタジー設定です。神道用語や祝詞も多く出てきますが、現実の定義や用法とは別物としてじい覽下とい。

あんた、雷は好きかい？

俺は大好きだね。自分の名前に雷の文字が入ってるからってのもあるが、真っ黒な雲の中にひらめく稻妻の光は、他のどんなものよりも格好いいじゃねえか。犬や狐や、小胆な奴らが、こぞつて穴蔵に頭をつつこんで震えている遙か上で、雲を引き裂き、空を駆け抜けろ。俺もあんな風に生きたいもんだ。

もつとも、そんな事が言えるのも、そいつが雨を連れて来ない場合だけだ。なぜかつて、俺は宿なしだから。

たまたま屋根の下にいる時はいいぜ、自分は濡れずに見物してられるからな。だが、こんな風に野原の真ん中でいきなりザーッと来られた日には、まつたく！

「くそったれ！」

文句のひとつも言いたくなるつもんだ。空きつ腹に雨がしみるぜ、ちくしょうめ。

右にも左にも、人家はまつたく見当たらなかつた。うち捨てられて荒れ放題の畠、ガマだの葦だのがぼうぼうに茂つた湿地。その間を走るこの小道の先には、前の宿でおかみが言つたのが正しければ、そろそろ豊平とよひらの村が見えて来るはずだ。そしてそこには、妖あやかし退治で日銭を稼ぐ俺みたいな流れ者に、仕事や情報を恵んでくれる周旋屋がある。

……はず、なんだがな。くそ、雨で行く手が見えやしねえ。ああ、腹へつた。

手の甲で何度も目を拭つたが、後から後から滝のよつて雨水がしだたり落ちて、何もかもがぼんやりとにじんでいた。

だから、道端に木立が見えた時も、俺はそこに誰か あるいは

『何か』 がいるとは思わず、やれ助かつたと木陰に駆け込んだだけだった。

「ああくそ、ひでえ田にあつたぜ」

ふつ、と息をつくと、水しづきが散った。いやもう、頭のてっぺんから爪先まで、ずぶ濡れもいいとこだ。どつからどこまで自分の体で、着物で、草鞋なんか、わかりやしねえ。田ん玉まで流れちまつてやしねえだらうな。

あれこれ悪態をつきながら、なおも降り続く雨を恨めしく見上げた時だった。

フツ、と後ろで何かが息を吐いた。その熱が体に届く前に、俺はぱつと振り返り、腰に差した刀を抜いた。

待つてましたとばかり、雪のような白い輝きがこぼれる。俺の商売道具にして唯一の相棒、妖退治のために神殿で清められた銘刀、月華。どんな妖だらうと、こいつの前には……

「つて、なんだオイ」

構えた刃を下ろし、俺は拍子抜けした声をもらした。薄暗がりの中にいたのは、紛らわしくも真っ黒の犬つころだつたのだ。子犬と言つにはでかいが、まだ成犬じゃない。クウンと甘えるように鼻を鳴らし、無邪気な黒い目でじつとこっちを見上げてやがる。

「びつくりさせんじやねえよ、わんころが。腹がへつてんのか？」

悪いな、俺もだ。おまえにやる物がありや、自分で食つてるよ

やれやれ。俺はため息をついて月華を鞘に収めた。わんころはそれをじつと見つめ、それからおもむろに近寄ると、ふんふんと俺の手を嗅いだ。

「だから、何も持つてねえつひとつてんだ。シッシッ」

別に犬は嫌いじゃねえが、こつもまとわりつかれちや、落ち着かねえ。追い払おうとしたのに、わんころはしつこく俺の臭いを嗅ぎ、前足でちよいと袂を引っ掻きやがつた。

「ええい、食つちまうぞコリワ！」

業を煮やして俺がわめくのと、

「クロガネ、戻つてこい」

子供の声が言つのが、同時だつた。俺は犬を驚かそうとして両手を振り上げたまま、ぽかんとなつて声のした方を振り向いた。

木立の奥の暗がりに、ぼうつと白いものが浮かぶ。さては今度こそ妖か、と俺は警戒したが、じきに正体がわかつた。白犬を連れた、白い着物の子供だ。見たところ十一歳かそこらだが、こんな所で何してやがるんだ？

黒犬は尻尾をくるりと巻き上げて、嬉しそうにそつちへ駆け戻つて行つた。小僧は黒犬の頭をちょっととなでてから、顔を上げてまつすぐに俺を見た。

「脅かしてごめんよ、おじさん。こいつ人懐っこくて、構つてくれそうな人を見付けたらすぐに飛んでっちゃうんだ」

「誰がおじさんだ、お兄さんと言え」

餓鬼から見りやあつさんでも、俺はまだ三十路のかなり手前だ。見知らぬ餓鬼から小父さんおじなんぞと呼ばれるほど、老けちゃいねえ。俺が唸ると、小僧は驚いたように目を丸くした。それからすぐ、面白そうに笑い出す。

「ごめん、お兄さん。俺あんまり、大人のひとの歳つて分かんなくてさ。第一この天氣でこの暗がりでその格好じや、おじさんでもおじいさんでも、区別なんてつかないよ」

笑われて俺は自分のなりを見下ろし、苦笑してしまつた。確かに、薄暗い木陰にずぶ濡れの男がぬーっと立つてたんじや、人か化け物かも分からねえな。

「まあな。で、おまえさんはどこの誰だい。その装束つてことは、神殿の小僧か」

俺が何げなく問うと、小僧はふつと表情を消した。どうやら身の上についてしゃ、あんまり詮索されたかねえらしい。短い沈黙の後、小僧は作つたような明るい口調で答えた。

「元は深谷の神殿にいたんだ。でも、一人前になるには、外へも出なきやいけないって言われてさ。探し物の途中なんだ。そうそう、

おじさんを驚かせたこいつは黒鉄、こいつの白いのは雪白。俺は真理だよ」

「ご大層な名前だな」

俺は呆れて一匹の犬を眺めた。わんころなんぞ、シロクロでいいじゃねえか。気取りやがつて、さすが神殿育ちはお犬様も違うつてことかねえ。小僧に至つては真理サマと来る。ペッペつ。それはともかく、名乗られちゃこっちも黙つてるわけにやいかねえ。

「俺はライカ、雷の火だ。流れ者でね」

「うん、賞金稼ぎだね。さっきの刀でわかつた」

けろりと言われ、俺は顔をこわばらせた。無理に笑みを作ると、

口が半分がひきつる。

「おい小僧、長生きしたきや、その呼び方はするんじやねえ」

「どうして？ 流れ者とか根無し草とか言つより、正しい呼び方だと思つけど」

きょとんとした小僧の面を張り飛ばさなかつたのは、ひとえに腹が減りすぎて怒りも長続きしなかつたからだ。

「正しくても、俺たちはそう呼ばれるのが嫌いなんだよ。向かつ腹が立つ。特に神殿の奴に言われるとな。神官どもは、自分たちが妖退治をするのは金のためじゃなく、里の人間を守るためだ、なんぞとぬかしやがる」

「だつて本当のことだよ」

「大人が話してる間は黙つてろ。で、奴らがいちいちかまけてられねえ雑魚には、雀の涙ほどの賞金をかけて、俺たちみたいな腕つ筋だけの荒くれ者が、日銭を稼げるようにしてやつてる、つてわけだ。飯の種をくれてやつてんだ、ありがたく思え、つてな」

大体があの連中は、神官以外の奴が妖と関ると、途端にクソでも見るような目つきをしやがる。月華みたいな刀は妖を斬つて穢れが溜まるから、時々神殿へ持つて行つて清める必要があるんだが、そんな時でも、絶対に正面からは入らせちゃくれねえのだ。

「ふうん。俺が聞いた話とはずいぶん違うね」

小僧は単純に不思議そつな顔をしてつぶやいた。俺はなんだか疲れてしまつて、近くの木にもたれると、ずるずる座り込んだ。

## 一 雨宿り（2）

「何を聞いたんだか知らねえが、世の中は良い子ちゃんの耳に入る気持ちのいい言葉ほどには、きれいでも楽しくもねえって事を」「ため息をつくと、腹の中に残っていた最後の空氣までなくなつたような気がした。俺は小僧を見上げ、「おい、なんか食うもん持つてねえか」と投げやりに訊いた。

「ごめん。俺も昨日から何も食べてないんだ」

がつくり。俺は頭を膝の間に落とした。隣に小僧が来て、すとんと腰を下ろす。ちえつ、本当にこの一匹の犬を食つてやれたらいいんだがなあ。

と、小僧は何やらじりじりとやつて、胴乱から小さな物を取り出した。

「これぐらいならあるけど」

この際、口に入るならなんでもいい。俺はぱつと小僧の手に飛びついた。そしてふたたびがつくりする。木の皮じゃねえか。

「おなかは膨れないけど、少しは気が紛れるよ」

ほら、と小僧が言うので、何もないよりはマシかとその木つ端を受け取つてくわえた。しがんでいると、甘いような苦いような、妙な味が染み出でくる。確かに腹の足しにはならねえが、なんとなく飢えがおさまつたような気がした。不思議なもんだ。

俺が骨をしゃぶる犬みたいにいじましく木の皮をかじつてみると、横で小僧が勝手にしゃべりだした。

「俺がいた深谷の神殿ではね、賞金稼ぎには……あ、ごめん。流れ者には感謝しろって教えられたんだ」

「へーえ、そりやまた奇特なこつた」

「神官の中でも法部に属する戦士たちは、いつも何人かで組んで妖退治をしているから、一人で勝手にあちこちに行くことは出来ないんだつて。一匹一匹の小さな妖が悪さをしたからつて、ちょっと行

つて退治する、つてことが出来ないんだよ。そこで、おじ……お兄さんたちの出番だつてわけ」

小僧はそこまで言つて、俺が聞いてるかどうか確かめるように、こっちの顔を覗き込んだ。ちえつ、まったく、なんて目をしてやがるんだか。純真無垢つてのはこいつのを言つのかね。

「知つてる？ 賞金稼ぎの中には、元神官戦士つて人も結構いるんだよ」

「そいつあ初耳だな」

俺は思わず本氣で驚いてしまつた。小僧は得たりとばかり、にっこりする。

「きつとおじ……お兄さんみたいに神官を嫌う人が多いから、言わないんじゃないかな」

厭味な小僧だな、いちいち言い直すんじゃねえよ、ちくしょう。俺は苦い顔で睨んでやつたが、薄暗がりだから見えなかつたらしい。小僧は気にせず話を続けた。

「でも俺たちはそういう人の話をよく聞くよ。人を守りたくて神官になつたのに、まるで自由がきかないから、しまいに誰かを助けるために飛び出して行つちゃうんだつてさ」

「それが本当なら、神官も捨てたもんじゃねえがな。しかし俺が見てきた限りじゃ、神官なんぞ、どいつもこいつもくそつたれだ」

俺は言い捨てて、雨足の弱まつてきた空を見上げた。さつきよう明るくなつてきたようだ。これなら、もうじき出発できるだひう。今日中には豊平に着きたいからな。

小僧は、俺があんまり感動しなかつたせいか、ちょいとがつかりした様子で黙り込んだ。これだから餓鬼は嫌いなんだ、なんで俺がこんな気分にならなきゃなんねえんだよ？ 俺は弱い者いじめした悪党か？ 本当のことを言つただけだつてのに！ ああもう。

しそうがねえ。俺はため息をついて、小僧の話に調子を合わせてやつた。

「まあな、おまえがいたような田舎の神殿じゃ、話は違うのかも知

れねえな。俺はだいたい、豊かな村や大きな町を回って、せこい妖怪ばかり退治してるからよ。そういう所の神殿はどかーんとでかくて立派だから、神官の連中もお高くとまつてやがるんだ

「そうかもね」

小僧は言つて、神妙な顔つきでうなずいた。やれやれ。

「おつ……雨がやんだみたいだな。んじやな」

俺は立ち上がると、口にくわえていた木の皮をちょいとつまんで、

「これ、ありがとよ

礼を言つてからその辺にポイと捨てた。俺が歩きだすより早く、小僧が慌てて立ち上がり、一匹の犬とそろって俺を見上げた。おいで、まさか。

「もう行くの？」

……待て。ちょっと待て、待てつたら！ そんな目で俺を見るな！ しかも三人がかりとは卑怯だぞ！

「勘弁してくれ」

俺はうめいて顔を覆つた。冗談じゃねえ、てめえの飯もままならねえつてのに、いきなり一人と一匹の食いぶちまで面倒見られるかつてんだ。

苦惱する俺を見て、小僧はおかしそうな笑い声を立てた。

「待つてよ、俺まだ何も言つてないよ」

「言つたも同然だろうが、くそ、わんこ今まで一緒になつて見つめやがつて！」

「あはは、おじさん、犬好きなんだ」

「おじさんじやねえつつってんだろ！」

凄んで見せたが、効果はなかつた。ごめんごめん、なんて言いながら、小僧はけたけた笑つてやがる。

「はあ……まつたく。あのな、俺はこれから豊平に行って、周旋屋で仕事もらつて、それを片付けなきや飯一杯にもありつけねえんだぞ。ついて来たつて、いい事なんざなんつにもねえんだぞ」

「心配しなくとも、俺だつて妖退治に手を貸せるよ。こう見えても

一応、神官としての修行は積んでるからね。簡単な法術は使えるし、剣も持つてる。雪白と黒鉄も戦えるよ」

「どうだかな」

俺は胡散臭い気分で一匹の犬を見やつた。黒助の方は相変わらず機嫌良さそうに、尻尾を小さく揺らしながら無邪気に俺を見つめている。白い方は逆に、俺を踏みするような目付きをしやがつた。何様のつもりだ、このわんころが。

「どっちにしろおまえらの行き先も豊平だつてんなら、しょうがねえ、『一緒にするさ。けど、いいのか？』何か探し物をしてるんだろ」念のため小僧に確かめると、なぜだか小僧は急に曖昧な顔になつてうなずいた。

「うん、いいんだ。どこにあるのか、はっきり分かつてるわけじゃないから」

「……へえ？」

「いつたい何を探してるってんだ？ ちよいと気にはなるが、どうせそう長く一緒にいるわけでもねえだろ？ 俺の知ったこっちゃやねえな。」

「じゃ、日が暮れちまわねえ内に行くか！」

景気づけに威勢よく上げた声に調子を合わせ、疲れた足を励まして歩きだす。

少し進んでから、俺はふと何かが気にかかり、ちらつと後ろを振り返った。小僧とわんころはしつかりついて来ている。どうやら、空腹のあまり木陰でまぼろしを見た、という都合のいい話にはなつてくれねえらしい。

（しかも……なんか余計なもんまでいやがるぞ）

俺は何も見なかつたふりで、また前を向いた。だが間違えようもなく、俺たちのずっと後ろに、そこだけまだ雨が止んでいないかのような暗がりが、うつそりと佇んでいた。

振り向かなくても分かる。そいつは、俺たちを黙つて見送り……

それからゆっくり、後を追つて動き出すのだ。

妖とは少し気配が違つ。今のところ悪をする様子もない。下手につついて招き寄せるより、放つておきや自然に離れてくれるだろう。たぶん。

(でなけりや、こここの出番つてだけだ)

俺は左手で月華の鞘を握り、そくならしいことを祈つた。この刀であいつが斬れるかどうか、ちょいと自信がなかつたからだ。

豊平村はその名の通り、豊かな平地だ。田圃には稲が青々と茂り、構えのでかい家が続いている。村の中心部に近づくにつれて、街道沿いにちまたました家が増えてきた。里の者や旅人を相手にした、色々な店の並びだ。

俺の後ろを歩きながら、小僧は物珍しげに、やたらきょろきょろしている。まあ、あちこちに走つてつたり店先で騒いだりしねえだけ良しとするか……。里に入る前にあの影も薄くなつて消えちまつたようだし、贅沢言つてちやきりがねえ。

道に面した店はどれも、構えはそれなりだが、商いは田舎の里らしく地味なもんばかりだ。鋳掛屋だの荒物屋だの、茶店だの。もちろん旅籠もあるが、今の俺たちや文無しだ。ちえつ、早いとこ周旋屋を見付けねえとな。

「にぎやかな町だね」

ふいに小僧が言った。俺は振り返り、呆れ顔をする。

「深谷ってのはどんなんド田舎だ？ 確かにここはそれなりの村じやあるが、町なんて言えるもんじやねえぞ。町つてのはな、もつと色んな店がうわーっと並んでて、人通りもこんなもんじやねえ。飯屋に煮売屋、小間物屋。職人だつて建具師に大工に庭師に細工師とわんさか住んでるもんだ」

「ふうん。想像つかないや。深谷はね、百姓と炭焼きと獵師ぐらいしかいなくて、神殿にも明師様と書士さんがいるだけだつたんだ」「ミコウシ？ ああ、祭礼を司る神官だな。それと記録係のオマケつきか」

神殿てのは、神様を祀つてるだけじゃなく、里の住民の記録をつけてもいる。生れた、死んだ、結婚した。そのいちいちに神殿が

絡むんだから、当然だつて言やあ当然だ。で、もちろんそういう事がある度に金がかかる。神官サマが帳簿までつけてたんじや、肝心の祭礼がおろそかになるつてんで、その仕事専門の下つ端がいるわけで。

「そんなんド田舎じや、神官一人でも事足りるだらうに。金が余つてるんなら、俺によこせつてんだ」

けつ、と俺が毒づくと、小僧はこっちを見上げて、大人じみた苦笑を浮かべやがつた。

「明師様はもうだいぶ、お年だつたからね。書き物をするには目が不自由だつたんだよ」

「おまえにやらせりや 手習いにもなつて、一石一鳥じやねえか。おつ、周旋屋の看板だ。やつと見付けたぞ。ちょっとでも前払いしてくれりやいいんだがな」

「ごめんよ、と声をかけながら暖簾をくぐる。中には人つ子一人いなかつた。ここが平和な里だつて証拠だな。こりや、仕事があるかどうか怪しいぞ。

「誰かいねえのかい」

声を張り上げると、奥から「はいはい、ただ今」と男が一人、慌ててやつて來た。血色のいいぼつちやりした丸顔の中年だ。何がな

し気に食わねえが、周旋屋の親父がどうでも仕事は仕事、錢は錢。

「よう。どうやらここは平和な里らしげが、流れ者もおこぼれにあずからせちゃくれねえか。できれば手つ取り早く済ませられるのがいいんだがね」

「それでしたら……」

親父は言いかけ、ぎょっと目を剥いた。なんなんだ？

俺は背後を振り返つて、ああ、と納得した。餓鬼に犬ころまで連

れた賞金稼ぎなんざ、そつそつお目にかかるもんじやねえよな。

「後ろの奴らは気にすんなよ。そちらで行き会つてたまたま一緒になつただけだ」

「はあ……でも、神官様で？」

「まさか。こいつは白装束を着ちゃいるが、まだ神官じゃねえ。——人前になるために修行してるところなんだよ」

「それはまた、こんなに幼いのに感心なことで」

親父は愛想笑いを浮かべ、揉み手でもしそうな様子で小僧の顔色をうががう。やつぱり気に食わねえ。

「そいつのこたあどうでもいい。こちとら空きつ腹抱えて待つてんだよ、さつむと仕事をよこしやがれ」

苛々して物言いが剣呑になる。くそ、腹が減りすぎて親父の機嫌を取る余裕もありやしねえ。もちもちしたその頬つべた、むしりとつて食つてやろうか。

俺の心中が分かつたのか、親父は慌ててこちらに向き直ると、いそいそと帳面をめぐりだした。

「はいはい、失礼致しました。何分この豊平は御靈も妖もとんと出ない所ですからね、神殿の方にもここ数年はまつたくお願ひすることもないほどでして……でもまあ、お困りのようだから、これなんていかがです」

親父は帳面を広げ、俺の方に向けて差し出した。俺はざつと目を通し、妙な顔になる。

「ふーん？ 要するに、この巫師を追い出してくれつてことかい」

「ええ、そうです。村外れに住み着いておりましてね、何やら怪しい影やら奇妙な生き物が、その家の近くをうろついているのが薄気味悪くて。とは言つても今のところは格別悪さをするでもないんで、神殿にお願いするほどのことでもありませんし。第一、神官様において頂くとなつたら、謝礼もかなりのものですから、とてもとても」「なんで自分たちで追い出さねえんだい。里の衆が皆して鍬持つて脅しをかけりや、一発で出て行きそうな気がするがね」

「無茶おっしゃらんで下さこよ。あたしらは妖のことも御靈のことも、何も知らんのですよ。下手をして怒らせたらどうなるか！ だから皆で金を出し合つて、賞金稼ぎに頼むことにしたんですよ」

親父は大袈裟なほどおびえた顔をして、身震いした。やれやれ、

白けちまつ。

「まあな、流れ者だつたら祟られようが呪い殺されようが、あんた  
らは痛くも痒くもねえからな」

「何をおっしゃこますか、そちらさんは妖退治の玄人でしょ？」  
年寄りの巫師ひとりぐらい、簡単なものでしょ。ああそりだ、  
引き受けて頂けるのなら、いくらか前払いしますよ。腹が減つては  
戦は出来ぬ。そうでしょ？」

痛いところを突いてきやがる。俺は苦笑いするしかなかつた。村  
外れにおとなしく住まつてゐる年寄りを追い出すなんざ、あんまり氣  
持ちのいい仕事じゃねえが、仕方ねえ。こちとら腹と背中がくつ  
きそりなんだ。

「ああ、確かに。ほかには何もねえんだろ？ 引き受けるわ」

てなわけで、俺と小僧は無事、かなり遅い昼飯にありついた。

一膳飯屋はもう店仕舞いをしかけていたが、こういう時は子供と  
犬ころつて取り合はせは激烈によく効く。給仕の女が、俺のことを  
人買ひでも見るよつに睨みやがつたのは、ちと引っ掛かるが、とも  
かくまあ飯が食えりや何だつていいさ。

「お、来た来た。二日ぶりのまともな飯だ、ありがてえ  
湯気を立ててゐる飯に両手を合わせてから、まずは一口。

「…………？」

おかしいな、こんだけ腹が減つてりや大概のものは美味いはずな  
んだが。まずはねえんだが、何かこう、足りねえつて言つたか、妙  
な味だな。茄子の煮物の方は……うん、美味い。はて、どういうこ  
つた？

複雑な顔でもぐもぐ口を動かしつつ、思わずちぢつと店の奥を見  
る。たまたま目が合つた給仕の女が、俺の顔を見て眉を逆立てやが  
つた。うへえ、くわばらくわばらく。

慌てて飯に向き直つて一心に食ひ、あらかた片付いた頃になつて  
小僧が口をきいた。

「雷火さん」

名前で呼びかけられ、およ、と俺は目をしばたいた。何度もおじさんと言つてはお兄さんと言い直すのが、いよいよ面倒になつたつてわけか。

「なんだ？」

「俺たちが追い出すつていう、フシつて……何？」

おずおずと訊かれ、俺は目を丸くした。

「知らねえのか？ おいおい、冗談だろ。深谷つてのがいかにド田舎でも、一人ぐらいなかつたのか？」

「いなかつたよ。神殿でも教わらなかつたし」

「はあ……こりやたまげた。まあ、そんな所じや巫師がどうのと教えてもしょうがねえよな。そうだな、どう言やあいいか……」

俺は、足元で残り物をがつついでいる一匹の犬にちょっと目をやつてから、もつたいぶつて説明してやつた。

「巫師つてのはな、神官とは違うやり方で、妖や御靈を呼び寄せたり操つたりする連中さ。それで人に呪いをかけたり、人の秘密を暴いたり、縁結びや縁切りをしたりするんだ」

「悪い人たちなんだね？」

小僧が眉をひそめたので、俺はますます先輩面をしてそつくり返つた。

「まあ大半はそうだな。話の通じねえ恐ろしいジジババばかりだが、皆が皆そつてわけじやねえ。病や怪我や災難をふつかけることも出来るが、逆のこと、つまり治す方も出来るんだ。ただ神官と違つて連中は自分勝手にやつてるから、そこんとこが厄介なのさ。病を治して貰いに行つたのに、怒らせたら逆にもつと悪くされるかも知れねえ。道ですれ違つたのに挨拶しなかつたら、次の朝には大事な牛が死んでるかも知れねえ」

そこまで言つて、茶をする。小僧は難しそうな顔で考え込んでいた。

「やっぱり悪い人みたいに聞こえるけど」

「悪いことをするが、貧乏人にとっちゃ重宝もあるのさ。さつきの親父も言つてたろ、神官は金がかかる、つて。巫師の方がたいていは安上がりなんだ。それに、隣のいけすかねえじじいをぎつくり腰してくれとか、村一番の別嬪さんを嫁にしたいとか、そういう頼み事は神官には出来ねえしな」

俺はちよつと意地の悪い気分になつて、にやにやしながら言つた。はてさて、神殿育ちの純真な小僧がどんな反応をするものや。ところが小僧が言つたことときたら、俺の予想とはてんて違つていた。

「でもこの村では、氣味が悪いから追い出そうって言つんだね。しかも自分たちでするんじやなしに、よそ者にやらせようとしてる。なんだか嫌な感じだなあ」

およよ。こりや驚いたね。俺はとつたに何と言つたら良いものか分からず、馬鹿みたいにぽかんと口を開けて絶句した。真理の名前は伊達じやねえつてことらしい。

俺がまじまじと見ているのに気付き、小僧は顔を上げて「なに」と不審げに眉を寄せた。ちょいとばかし照れもまじっていたかも知れない。

「いやあ、おまえさん、世間知らずかと思ひきや、なかなか言つじやねえか」

「えつ……俺、何か変なこと言つた?」

途端に小僧は赤くなる。俺はにやつとして身を屈め、小僧に耳打ちした。

「いや、この仕事が気に食わねえのは俺も同じさ。でもそれは、村中じや黙つてな」

それから俺はまた体を起こし、やれやれとこれ見よがしに伸びをしてから、楊枝で歯をせせつた。小僧は複雑な顔で俺を眺めていたが、やがてその目を楊枝入れに移し、おもむろに一本抜いて俺の真似を始めやがつた。

「おいおい、やめとけよ。神官にならうつてえ奴が下衆な癖をつけ

ちや困るぜ」

「そつなの？」

きよとんとして問い合わせ返し、小僧は楊枝を前歯で挟んでぶらぶらさせ。何やつてんだ、こいつは。俺は苦笑してその楊枝を取り上げ、空になつた茶碗に放りこんだ。

「それより、おまえのことを聞かせろよ。何か探してゐつたよな。何なんだ？」

俺の質問に、すぐには返事がなかつた。小僧は頭を伏せて、未練がましく楊枝を見ているふりをしたが、じばらくしてようやくぽつりと答えた。

「しるし」

「あ？」

「しるしを探してゐんだ。一人前になる前に、誰もが自分だけの『しるし』を見付けなきやいけないんだつて。それが何なのかは人によつて様々だけど、見れば必ず、それが自分の『しるし』だと分かる。だから、どこにあるどんな物かは、誰にも教えることは出来ないんだつてさ」

「……何だそりや。んじや何か、『これだ!』つて閃くまで、いつまでもどこまでも探し続けなきやならねえつてことか? だったらそちらで適当なもの見繕つて帰つたつて、バレねえんじやねえのかい」

神官のやるこたあよく分からん。呆れた俺に、小僧は真剣な顔で首を振つた。

「そういう問題じやないんだ。法術や剣術を修めても、『しるし』を見付けなきや、自分を守つてくれる一番大事な力が得られないんだつて」

「へーえ。普通はどうこつものなんだ?」

「よく知らないんだ。深谷には戦士がいなかつたから」「明師さんは、妖退治はしねえのか」

「儀式で祓えるものなら退治するよ。でも武器や法術で戦うのは、

法部の人。法師とか戦士とかね。俺はまだ侍士だけど。『しるし』はね、時々来て下さつてた羽山の法師様の話だと、鴉や犬みたいな動物だつたり、草木や川だつたりするんだつて。太陽や月をしるしに持つ人は、ものすごく強いらしいよ

話が戦士のことになつた途端、嬉しそうによくまあしゃべること。それだけ憧れてるつてことなんだろうなあ。その笑顔があんまり無邪気なもんで、俺は、胸に浮かんだ疑問はどうぞへ蹴つ飛ばして、別の事を口にした。

「おまえのも、何か格好いい『しるし』だといいな。何たつて名前が真理なんだ、それに見合うのになきやな

「俺は別に、蟻とか石でもいいんだけどね」

照れたように言いながらも、真理は期待に目を輝かせている。だから俺は言い出せなかつた。

おまえみたいな小せえ子供が、もう一人前になるための『しるし』探しに出されるもんなのか、とか。

誰も深谷の名前を聞いたことがねえような遠い土地まで来なきや、『しるし』つてのは見付からねえもんのか、とか。

そういうことは、訊いちゃいけねえ気がした。

三

腹ごしらえを済ませて一休みした後、俺と小僧は連れ立つて村外へ向かった。もちろん、白黒のわんこらども一緒にだ。

巫師の住み着いたあばら家つてのは、田園の間を走る小川に沿つて、ずっと川上へ行つたところにあるひて話だつたが、途中やたらと一匹の犬があちこち嗅ぎ回るんで、はからねえつたらありやしないえ。日が暮れる前にやつつけちまいてえのに、人間様の都合なんざお構いなしだ。

田園にはちょうど水が張つてある時期で、稻の青々とした葉が風にそいでいる。世話が行き届いていると見えて、何だか偽物臭えぐらいにきれいだ。川っぺりにはぼつぼつと若木が植えられていたりして、趣もある。しかし、あいにくこちとら風流とは縁遠い流れ者だ。わんころに付き合つて、田園を見ながら歌を詠むつてわけにもいかねえ。

「おい真理、この白黒兄弟、もちつときちんとしつけとけよ。道草ばっか食いやがつて

「何がが気になるんだよ」

答えた小僧も落ち着かない様子で、辺りを窺つている。

「何かつて、何が

「分からぬ。でも、この村は変だつて気がする」

「おまえ、ほかの村を見たことがあるのか？」

思わずそう言つた俺に、小僧はいっちょまえにムツとした顔を向けた。

「そういう意味じゃなくて」

「ああ、分かつた、分かつてゐる。悪かつた」

俺は慌てて手を挙げ、小僧を遮つた。やれやれ、冗談が通じねえ

なあ。俺は足を止めてため息をつき、草むらでふんふんやってるわんこらんどを見やつた。

「確かに、この村はどことなく妙な空気が流れてる。それは俺も同感だよ。このぐらいの村になりや、人里に群がる小物の妖がちらほらしてるもんだ。神殿がすぐ近くにある場合は別だが、こここの神殿はどうやらちょっと遠いようだし、そこらに何か飛んでたつておかしかねえ。だがさつぱり見当たらねえとなると、村全体によつぽど強力なまじないでもかけてあるのか、その村外れの巫師がこの辺の妖を一匹残らず呼び集めてるのか……」

曖昧に言葉を濁した俺に代わつて、小僧が偉そうに締めくくつた。

「何にしろ油断は禁物、だね」

生意氣な。そりや俺の台詞だつつの。とは思えど、それを口に出しちゃ大人氣ねえ。

「そーゆーこつた

それだけ言つて、ぺしんと軽く小僧の頭をはたいてやつた。

「おり行くぞわんこらんども。さつさと片付けて財布にも餌をやらねえと、また野宿になつちまうぞ。おまえらは地べたで良くてもな、人間様はたまにや布団で寝たいんだ」

白黒一匹を急き立てながら、さらに小川沿いの道を進む。田圃が途切れで人影もなくなつた辺りで、ようやく目指す小屋が見付かつた。どうやら水車小屋だつたらしいが、ぶつ壊れちまつてるのは遠目にも分かつた。茅葺き屋根にベンベン草が生えてらあ。

「ふーむ……見たとこ、特に変なもんはいねえな」

ちよいと手前で立ち止まり、とつくり小屋を眺めてみる。妖の姿はちらとも見えねえし、御靈の影もねえ。周旋屋の親父が言つてた様子とは、ちと違うんじやないか？

「しかし何だね、嫌な感じがしやがるよ

無意識に手がうなじをさすつていた。妖にしろ御靈にしろ、性質の悪いのがいやがる時は、ここら辺がムズムズする。今もそうだ。横を見ると、小僧は打つて変わって真剣な顔つきになつていた。

「足の犬はそれぞれ小屋を睨み、喉の奥で小さく唸つてゐる。ビリやう、こいつらにも分かるらしい。

「とりあえず、俺が様子を見るからな。おまえらは下がつていろよ」  
餓鬼とわんこに先陣を切らせるわけにやいかねえ。俺は用心し  
いしい小屋に近付き、まだ明るいのこきつつけられた戸を開いた。

「おい、誰かいるか

バンバン。てのひらで一回。返事はない。

「いるんだる。巫師のじこさんよ」

ドンドンドンドン。拳で三回、呑き終えるや否や、ゴトコト戸が開いた。隙間から覗いた。面相に、俺はぎょつとなつて後ずさる。シミと皺だらけの、病葉みてえな皮が骸骨にへばりついた、なんとも化け物じみた顔だ。田ん玉は白く濁つていたが、それでも俺が見えるのか、ぎょろりとこいつを睨んでやがる。戸を開けた手はまるつきり枯れ枝みてえだ。

「よつ。村の周旋屋でちょっと頬まreteな

なんとか俺がそう言つた途端、犬どもがワンワン吠えだした。くそ、うるせえぞ！ 気が散るじゃねえか。

じじいは瞬きもせずに俺を見つめたまま、ゆつくり首を傾げた。そのままぽろつと首がもげちまうそうだ。うへえ。俺はゆがめた顔をごまかそつと咳払いして、言つても無駄だと予感しながら言葉を続けた。

「あんたが何をしたか知らねえが、村の連中はあんたがいるだけで不気味なんだよ。ここからあんたを追い出してくれつて頬まれたんだ」

「わしゃあ……出て、行かん……ぞお」

嗄れた声が、じじいの喉から隙間風よろしく漏れてくる。今にも死にそうな声のくせに、田だけはぎょりじつて、おつかねえつたらいいぜ。

「そつは言つてもな、こんなとこに住んでたつて、あんた何にもい

い事はねえだろ？ 村人に嫌われるんじゃ、客も来ねえんだし…

…つて、ああむつ、ワンワンうるせえな！」

俺が後ろをちらりと見て舌打ちしたと同時に、じじいがにたあつ

と笑つた。

「村の衆はあ、親切じゃで、な」

「何？ まさか」

やべえ！ 背筋に冷たいものが走り、俺は反射的に大きく飛び出すつた。

入れ替わりに白と黒の影がさつと前へ飛び出し、じじいに躍りかかる。その瞬間、じじいの体が音を立てて破裂した。

「うわッ！」

固いものに突き飛ばされ、俺はぶざまにひっくり返つた。ギャンツ、とわんころの悲鳴が聞こえる。ちくしょ、何がどうなつてんだ！？

頭を振つて起き上がるつとしたが、俺の体はでけえ木の根っこにがつちり押さえ込まれていた。なんなんだ、くそ！ 月華を抜こうにも手が動かせねえ。じたばたしていると、根っこに見えたものが、ナメクジみたにぐにやりと動いた。

「いつてえ！ くそおッ、離しやがれ化け物め、この……うげ！」

暴れると、根っこもどきがますます強く締め付けてきやがつた。無数の細い管が伸びて俺の体にはりつき、次々にブスリと突き刺さる。俺を針山にする気かよ！

その瞬間、俺の目の前にぬつと何かが現れた。

と思つたら黒鉄だ。化け物の根っこに食らいつき、牙を突き立てる。途端に化け物は、釣り上げられた魚よろしくビチビチ跳ねて、俺を離した。しめた！

隙を逃さず素早く立ち上がり、月華を抜く。巨大な根っこは犬を振り落とすと暴れまくつっていたが、黒鉄の奴はがつちり食らいついたままだ。いいぞ、やるじゃねえか。

「今度はこっちの番だ、よくもやりやあがつたな！」

俺は月華を振りかぶり、のたうつ木の根に斬りつけた。感触は確かに生木だったが、傷口からは赤黒い血が噴き出し、根っこは大慌てでズルズル下がつて行く。黒鉄がようやく奴を離し、俺のところに駆けてきた。

「助かつたぜ、ありがとよ」

まずはわんころに礼を言つてから、俺はようやく何がどうなつているのかを見た。

じじいがいた場所には……わけわからんねえ化け物がいやがつた。根っこだけの木、とでも言えばいいのか？ 普通なら幹になつてのはずのところには、じじいの頭がくつついていた。しかも馬鹿でえ。目ん玉ひとつで牛の頭ぐらいあるだろう。そのまわりから、人が一人がかりでも抱えられそうにない太い根が十本ばかり張り出して、のたりのたり氣味の悪い動きをしてやがる。びつしり生えたヒゲ根がザワザワうごめくさまたきたら、まるでムカデの足みてえだ。その、数百本はありそうな根の間から、時々ちらつと嫌なもんが顔を出す。しなびた鳥の死骸だとか、しゃれこうべだとか。てことは何か、つまり俺は奴の肥やしにされかかつたってわけか？ うえつ。

俺が愕然と立ちつくしていると、小僧と雪白が駆けつけてきた。

「おう、無事だつたか」

俺が言つと、小僧はうなずいて、嫌そうな顔でじじいの成れの果てと向き合つた。

「古い木の妖だね」

「ああ、そろそろタコに化けて海に行きたいらしいぜ」

ようやく奴の見た目が何に似ているか気付き、俺はそんな冗談を飛ばした。が、山奥育ちの小僧には通じなかつた。

「タコつて？」

「……ああいう、ぐねぐねうにうにした生き物だと思つとけ。それより、どうやつて始末する？ 僕一人じゃ、あの『足』全部はさばききれねえぞ。元が木だから、放つといて逃げちまえ、そつ遠くまで追つかけては来ねえだろうがなあ」

「そういうわけにはいかないよ」

即座に小僧が言い返す。まあな、と俺もうなずいた。そして二人

同時に口を開く。

「金が入らねえからな」

「人を襲う妖なんだから」

見事に全然違うことを言つちまつて、俺と小僧はしらけた顔になつた。そんなこつたるうとは思つたがね。やれやれ。俺はちょっと肩を竦めてから、氣を取り直して続けた。

「ま、何にしる始末はつけねえとな。俺もやられつ放しは癪だ。さてどうするかね」

「木だから火には弱いと思うんだけど、半端な炎じゃ効きそうにないしなあ。おじさん、まな真名の法術は使えない？」

「あ？ 俺は神官じやねえぞ。法術なんぞ使えるかよ」

「そうじやなくて……いいや、説明は後で。雪白、黒鉄！」

小僧が呼ぶと、二匹の犬はさつと小僧の前に座つた。小僧が左右の手をそれぞれの頭に置き、何やらぶつぶつ唱える。諸々の神たち聞し召したまえ、とかなんとか言つてゐようだが、そんな小声で神様に聞こえるもんかねえ。

俺はなんとなく胡散臭い気分で見ていたが、その目の前で、二匹の犬がぼんやり輝きだしたもので、さすがにあんぐり口を開けちまつた。しかもそれだけじやねえ、わんこりどもの姿がこつ、伸びたり膨れたりしたように見えたと思つたら！

聞いて驚け、瞬きひとつの中に、そこには白と黒の戦装束に身を包んだ若武者ふたりが立つていたのだ。いやまつたく、顎が外れるかと思つたね。ぽかんとしている俺に向かつて、白い方は犬の時と同じく冷たい目をくれ、黒い方はにっこり笑いかけやがつた。俺は何度も瞬きして目をこすつたが、どうやらまぼろしじやあないらしい。

「この世は一体どうしちまつたんだ？ じじいは弾けるわ、犬は化けるわ。俺は夢でも見てるのか」

「これは仮の姿だよ。おじさん、準備はいいかい？ できるだけ中心に近付いてから、本体に手のひらをしつかりと押し付けて。それから、俺の言うことを繰り返すんだ」

てきぱきと小僧が指図する。『こんな餓鬼に命令されるのは嬉しかねえが、化け犬の飼い主じや逆らえねえよなあ。どつちにじろ俺はこんな大物相手に戦つたことはねえ。』『このつの言ひ通りにするしかなさそうだ。ちえつ。』

あれこれ考えて俺がむつり黙つていると、雪白の方がじりじりと睨んできやがつた。ああ可愛くねえ！

『分かったよ』渋々答えて、俺は月華を構えた。『わいつわいつまおう。俺の血がすつかり流れ出ちまわねえうちにな』

そう、さつきやられた、細い針で突かれたような傷から、いつまでもしつこくじわじわと血がにじみ出てやがるのだ。このままじやあ田が回つてしまつ。小僧もやつとそれに気が付いたらしく、わいつと青ざめた。

『おいおい、そんな悲惨な顔するな。まだ倒れやしねえよ。んじや、行くか』

にやつとして見せた俺に、小僧は黙つてうなずく。その田が前を向き、妖を見据えた。

枯れ木じじいの方も、俺たちがまた近付くつもりだと察したらしい。根っこが激しく動きだし、俺たちの方へ伸びてきた。その細い先端が足に届きかけた寸前、

『行くよ！』

小僧が地を蹴つた。即座に田と黒の影が従う。俺も並んで走りだしていた。

一人の若武者が太刀をふるい、襲いかかる木の根をなぎ払う。もちろん俺の月華も負けちゃいねえ。しかし太い根はちょっとやそつとじや切れねえし、細い根はいくら払つても次々新しいのが生えてくる。

妖の血が辺り一面に飛び散つて、何とも言えない臭氣を放ちだした。その中を、俺と小僧は肩を並べてとにかく突き進む。

じじいの吐き出すかび臭い息が、まともに顔に吹き付けた。うえつぶ！ それを避けて横に回ると、小僧がいきなり俺の左手をつか

み、化け物に押し付けた。樹皮を張った生肉のような感触に、俺としたことが思わず怯みそうになる。

「おい！ くそ、無茶すんじゃねえ！」

慌てて俺は右手を振り上げ、危ういところで数本の根をなぎ払つたが、小僧は見ちゃいなかつた。

「背中は一人に任せて、復唱して。いい？」

ああ、そういうやうだった。視界の端でじじいの田玉がぎょろりと動くのが気になつたが、すぐに黒鉄が俺の背を守つて立ち、ついでにその鬱陶しい光景も隠してくれた。

「我が名は雷火」

小僧が唱える言葉をそのまま繰り返す。

「火は赤きほむらなり」

氣のせいか、てのひらが熱くなつてきたよくな……

「この名において命ずる」

手だけじゃねえ、胸の奥、肺腑の中に火がついたような、

「火炎招来！」

刹那、それが爆発した。

いや、俺の中の火だけじゃねえ。現実に、目の前が真つ赤に燃え上がつたのだ。

耳をつんざく悲鳴と熱風にふつ飛ばされ、俺は後ろへぐるぐる転がつていつた。あち、あちち、あちちち！

地面に転がつたままじたばたしていると、小僧が駆けつけて、俺の体に手をかざし、何かを払いのけるような仕草をした。途端にすうつと熱が引いていき、俺はほーと大きな息をつく。ああくそ、死ぬかと思つたぜ……。

大の字になつて伸びちまつた俺の上から、小僧がひょっこり顔をのぞかせやがつた。

「大丈夫？」

「んなわけねえだろ！ 馬鹿野郎、俺を焼き殺す氣か！？」

俺は飛び起きて、噛みつくように怒鳴つた。が、わめいた口を閉

じるか閉じないか、犬に戻った黒鉄の奴が飛んできて、べろべろ顔を舐めまくるもんだからたまらねえ。ああもつ、格好悪くて怒るに怒れねえだろが、ちくしょうめ。

「舐めるな！ 分かった、分かったよ、大丈夫だからやめろって！ やつとのことで黒鉄をひつペがすと、俺は袖で顔を拭つた。やれやれまたく……」

小僧がにやにやしてやがるのを睨みつけてから、俺は自分の表情を「こまかそつ」として、盛大な火柱を仰ぎ見た。生木だつてのによくまあ燃えるこつた。じじいはもはや悲鳴も上げず、根っここの端まですっかり炎に包まれている。水車小屋がべしゃんと音を立てて、炎の海に沈んだ。

思わずじつと自分の手を見つめていると、横から小僧が言った。いや、小僧つてのはやめたがいいな。化け犬の飼い主で、しかもこんな派手な火柱を立てちまう餓鬼だ。おつかねえ真理様の「高説拝聴」と言わなきゃならんか。

「ものの名前には力があるんだ。もちろん、人の名前もね。だからやり方さえ知つていれば、自分の名前からその力を引き出すことができるんだ。神官でなくともいいんだよ」

「はー、なるほどねえ……まあしかし、てめえがこんがり焼けちまうんじや、使いてえとは思わねえな」

「練習すれば、もつとうまく使いこなせるようになるよ

「まあ、気が向いたらな」

それだけ言つと、俺は考えるのも疲れて、またひっくり返つてしまつた。今日は働き過ぎだ。慣れねえことするもんじやねえや……。

## 四 村人と影（1）

### 四

火がおさまると、俺は川の上流で体を洗つて、真理の持つっていた血止め薬を塗つてもらつた。妖はすっかり消し炭になつちまって、もうすっかりただの古い木にしか見えねえ。

最前まで燃えていた炎がちぎれて飛んでつたみたいに、空はまぶしい茜色に輝いている。明日はいい天気になりそうだなあ。もつとも、俺たちが無事に明日を迎えられなきや、天気がどうでも関係なくなつちまうがね。

「さーて、と。ここからが面倒だぞ」

道端に座り込んだまま、俺は天を仰いだ。真理がきょとんとしてこつちを見る。お氣楽な奴だぜ。

「いいか、あのじじいは何て言つてた？ 村の衆は親切だ、つてな。ひとつ所からたいして動き回れねえ妖があそこまでかくなつたつてことは、誰かが餌の世話をしてやつてたつて事だ。だが村人を食つてたんなら、俺たちが出向くまでもなく、とつくに焼き打ちされちゃうな」

「ちよつと待つてよ、それじゃまさか、村の人たちが俺たちを騙してたつて言つのかい？」

「ほかにどう説明がつく？ 流れ者なら、いなくなつても誰も気にしねえだろ」

「でも、妖が負けたらどうなるのさ？ 今まで誰も倒せなかつたみたいだけど、それにしたつて、逃げた人もいるはずだよ。そしたら、神殿に知らせが行くはずで」

「そいつが神殿に行き着けたら、な」

俺は真理の反論を遮り、できるだけ淡々とした口調で言った。

「言いたかねえが、連中は獲物を選んでる。俺みたいにうだつの上

がらねえ流れ者は、せいぜい小物しか相手にした事がねえからな。まず確實に食われちまうだらうさ

「でも運よく逃げられるかも……」

「そう、俺みたいにな。で、そういう流れ者が次にどうするか。俺たちや、この後どうする？ 金が要るから仕事を請けた、そ娘娘？」

そこまで言つと、やつと真理も察したようだつた。愕然として口をぽかんと開け、絶句する。良い子にやちと刺激が強すぎたかね……。俺は頭を搔いた。

「分かったか？ だから、ここからが厄介だつて言つたのさ。依頼通り、怪しいじじいは追い出してやつたんだ。金を貰わずに行く法はねえ。だが連中がおとなしく代金を払つてくれるかどうかが問題だな」

「神殿に知らせに行けば？」

「信じてくれるとは思えねえな。当の妖はこれこの通りだし、この村の連中は全員で口裏を合わせてるだらうよ。おまえが神殿の者だつたらどうか信じる？ 胡散臭くて素性の知れねえ流れ者が、妖を退治してやつたんだから金をよこせつて言つとのと、その流れ者に因縁つけられた上に水車小屋を焼かれたつてえ可哀想な村人と」

「…………」

さすがにもう、真理もそれ以上は言い返さなかつた。俺たちは一人して、でつけたため息をついた。

「どうして村の人は、妖なんか養つてたんだろう」「…………」

「さあな。そんなこたあどうでもいいさ。どんな理由があるにせよ、あの枯れ木じじいは焼けちまつたんだ。後のことば村の連中に考えさせるさ。俺たちはとにかく、金が貰えりやいいんだ……よつ、と」

言葉尻で勢いをつけて立ち上がる。いつまでも座り込んで仕方がねえ。

「さて、行くか。黒鉄、雪白、おつかねえ村人からご主人様を守つてやるんだぞ」

俺が言うと、一匂のわんころはそれぞれなりの反応を見せた。つまり、雪白は「おまえに言われる筋合いはない」とばかりの面をし、黒鉄はピンと耳を立ててワンと一声。頬もしいこつた。

そんなわけで、俺たちは煤けてぼろぼろちくなつたまま、来た道を引き返した。

すれ違いざまに何人かが、ぎょっとしたり、慌ててどこかへ走つてつたりした。周旋屋へ知らせに行くんだろう。けつ。

道々、真理の奴はずつと黙りこくつていた。何を考えているのやら、難しい顔をして。ま、なんとなく想像はつくがね。だから俺は、周旋屋の前で真理のちつせえ鼻先に指を突き付けてやつた。

「おい。話せば分かる、なんて甘いこと考えるなよ」

どうやら図星だつたらしい。真理は途端に嫌な顔をしやがつた。拗ねたつて可愛かねえぞ、馬鹿。

「世の中、おまえが考えるほど簡単じゃねえんだ。どんなご立派なことを言つたつてな、生きのびなきや何の意味もねえ。大体、これ以上深入りしたつて、後々ここの連中の面倒見られるわけでもねえだろ。な？ おまえは黙つて、俺に任せときな

「……わかつたよ」

「よつし、いい子だ。じゃ、おまえとわんころどもは、ここに立て退路を確保しどけ。村の衆を近寄らせるんじやねえぞ」

言い置いて、俺は暖簾をくぐつた。

中にはまあ、怖そうな顔の若い衆がひい、ふつ、みい……六人ばかり。狭苦しい店で待ち伏せとは、ご苦労なこつた。だが、俺が月華の鯉口を切ると、どいつも怯んだ様子を見せた。

「ひと仕事片付けてきた流れ者を労つてくれる、つてえ雰囲気じやねえな。言つとくが、いまさら俺をぶちのめしても意味がねえぜ。あの妖は盛大に燃えちまつたからな」

「何の事ですかね」

周旋屋の親父が陰気な声で言つた。もちろん、とぼけているわけじやねえ。目と目が合うと、相手は一切了承済み、つてのが分かつ

た。俺は肩を竦め、番台に近付いた。

「あんたが追い出してくれつづった巫師のじじいはな、妖が化けたのさ。だから退治した。結果としちゃ、依頼の通りだ。あとは金さえ貰えりや、こつもの仕事と同じ、吹聴するほどのことねえ」要するに、出すもん出しやあ黙つといてやる、って事だ。お互い、そこまで口にしたりはしねえが、親父もその事は分かつて。黙つて番台の下から、銭の入った巾着を取り出した。じゅらりと音ばかりは大層だが、銅銭ばかりで銀は一枚もねえ。

「ちと足りねえんじやねえかい。前払いの分を合わせても、二人分の報酬には少ないぜ」

「お客さん、欲深は運を逃すことになりますよ  
「そんなら神殿に行つて、悪運を祓つてもらつや」

ちくちくと嫌な応酬が続く。これまで何人の流れ者が同じようこの親父に文句をつけて、ここに控えている若い衆にのされちまたのやら。連中が手を出さねえのは、ひとえに俺が見た目よりも腕の立つことを恐れているからだ。こつちがちょっとでも脅えたら、瞬く間に食いつかれるだろ。」

しばらく睨み合つた末に、親父は渋々と銀貨を出してきた。正直なところまだ足りねえと思ったが、親父の言つ通り、欲は身を滅ぼす。ここらで手を打つか……。

俺は用心しながら素早く金を取り、袂に落とした。

「じゃ、あばよ。一度と来ねえから安心しな」

捨て台詞を残してわざとおさらばしようとしたのだが、ちつとばかり動作が早すぎたらし。背を向けた途端、俺の焦りを見抜いた親父が声を上げた。

「やれッ！」

同時に俺は、前へ飛ぶように転がつた。空振りした棒や竹竿が絡まり、派手に騒ぎ立てる。俺は振り返らず、そのまま表へ飛び出した。

だが、それより先へは行けなかつた。手に手に鍬だの鎌だの持つ

た連中が、ぐるりと店を取り囲んでいたのだ。一匹のわんころが牙をむいて唸っているが、じわじわと村人の半円が縮まつてくる。中には申し訳なさそうな顔をした女までいやがつた。くそ、悪いと思うなら一緒になつてんじゃねえよ！

「おじさん……」

真理が青ざめた顔で振り向く。さもありなん、妖と違つてこいつらは人間だ。簡単に吹っ飛ばしたり斬り殺したりできるもんでもない。一人一人ならちよいと怪我をさせてやりや逃げるだろうが、これだけ大勢となると、かえつて逆上して手がつけられなくなつちまう。なぶり殺しにされるなんざ、考えたくもねえや。

俺は真理と背中合わせに立ち、店から飛び出してきた血の氣の多い奴を、顔面への一撃で殴り倒してやつた。

#### 四 村人と影（2）

「そいつらを村の外に出すな！」

店の奥から周旋屋の怒声が飛んだ。

「ちつ、疑り深え親父だぜ。一度と来ねえつつてんだろが！ それとも何か、これっぱかしの手切れ金も惜しいのかよ！」「金は問題じやあないんですよ」

親父が戸口に姿を現す。最初のいけ好かねえ丸ぼちや親父の印象は、いまや他人の血で肥え太った極悪人に変わっていた。まったく、まさかここまでとはね。俺は月華の柄にそっと手をかけた。

「だつたら何だつてんだ。言つたら、俺は金さえ貰えれば、おまえらがやつっていた事についてちや気にしねえ。それに、あの妖が焼けちまつた今じや、何を吹聴してもただの法螺にしかならねえんだ。何も問題はねえだろうが」

返事がない。俺は背筋がぞくつとした。おいおい、まさか……

「あれで終わりじやねえつてのか？」

声がかされた。背中越しに、真理が身をこわばらせるのが分かる。ちくしょく、こりやまずいぞ。

「あれのことを知られたら、この村は終わりだ」

人垣の中から、誰かが言つた。

「可哀想だけじや、よそ者は信用できないんだよ」

「ごめんね、なんぞと言ひながら、女が鎌を握り直す。勘弁してくれ。と、いきなり真理が声を上げた。

「いつたい……どうして、どうしてそこまでして妖をかばうんですか。あの妖がそんなに大切なんですか！？」

泣き出しそうな声に、村人たちが一瞬、たじろいだ。さすがに後ろめたいらしい。だがそれでも、囮みは緩まなかつた。慣れてやがるんだ、こいつらは。助けてくれつて声も、しゃべらないから見逃

してくれつて頼みも、こいつらは聞き飽きて何も感じなくなつてやがるに違ひねえ。なんて連中だ、くそつ！

「坊や、あの榛の木はあたしらにとつて、なくぢやならないものなんだよ。ここで暮らせばきっと分かるよ」

別の女が言つた。途端に、馬鹿を言つた、とまわりから咎められる。なるほど、大人は殺しても胸が痛まねえが、子供だから助けてやろうつてわけかい。一生この村に留まらせれば、秘密も漏れねえつてか？ 図々しい。

緊張のせいか、頭の回転がいつもの倍ぐらいに速くなつた気がした。

あの妖はこいつら全員にとつて「なくぢやならないもの」だが、いなくなつたら途端に何かが変わるつてもんでもないらしい。燃えた時に何も起こらなかつたしな。

で、奴はもともと榛の木で、つまり湿地に生えるが田圃の畦にもよく植えられてたりする木だ。奴がいたのも小川の上流。そういう川つべりに若木が植えられてたよなあ。しかもこの豊平はその名の通り豊かな米蔵。とくれば……。

「ははあ、なるほどね。おまえら、あの妖に何か細工させてたんだな？ 稲がよく実るよつて、水や土にませものでもさせてたんだろう

「！」

背後で真理が息を飲む。村人たちの顔色がさつと変わつた。大当たり。

道理で白黒一匹がやたらと水辺を嗅ぎ回つていたわけだ。世話の行き届いた田圃だと思ったが、雑草も虫も、あまりにも余計なものがなすぎた。飯が変な味だつたのも、穢れた水で育つたせいだな。納得している俺に、周旋屋の親父が苦々しく唸つた。

「ご明察。流れ者にしては頭が切れなさるね」

「そりやどうも。褒めたついでに見逃しちゃくれねえか。それとも、こいつの切れ味も試してみたいかい」

月華を鞘の上から軽く叩く。真相を見抜かれたところへ脅しをかけられ、さすがに親父も怯んだ。が、やつぱりそれでも、覚悟は変わらねえらしい。後ずさつたのもわずかに半歩、すぐに威儀を正して、腰の引けた村人たちをぐっとねめまわしやがった。

こうなつたら仕方がねえ。俺はため息をつくと、諦めて月華の柄を握った。気は進まねえが、何人かぶつた斬つてでも逃げなきやな。何せ今は小僧と犬を養つてんだからよ。

「おい真理……」

背中越しにひそつとささやく。囮みの薄そうな所を指して、同時に突っ込むぞ、と合図した。が、真理の奴、聞いちゃいなかつた。真つ黒な目を見開いて、自分たちの影が長く伸びている通りの向こうを凝視したまま、かたまつちまつてやがる。

しつかりしる、と言いかけてその瞬間、俺も立ち竦んだ。地面につけた両足から、ぞわぞわつ、とものすごい悪寒が体をはいあがり、頭のてっぺんまで突き抜けたのだ。髪が全部逆立つ気がした。何だよこれは！

視線を落とすと、一匹の犬が耳をぴつたり寝かせ、鼻面に皺を寄せて牙をむき出していた。が、尻尾は足の間に巻き込まれ、今にもキヤンキヤン鳴いて逃げ出しそうだ。

村の連中は俺たちほどには敏感じゃねえらしいが、それでも何か寒気はしたらしい。顔を見合わせ、ざわつきながらてんてこ背後を振り返る。

「やばい

口が勝手につぶやいた。まずい、いけねえ、何か良くなもんが来やがる。俺の頭にはもづ、村の連中のことなんざ微塵も残つちゃいなかつた。

お天道様が沈んでいくのを、繩をかけてでも引き戻したくなつた。東の方から薄闇が迫つてくる。その中に出来たひときわ暗い影が、通りの向こうからやって来る。

あいつだ。

村に入る前に、道で俺たちの後をつけてきた、あの影だ。ちくし  
ょう！

逃げなきやならねえのは分かつてゐるに、足は動かねえし、声も  
出せねえ。

視界の隅で、村人たちが同じように石になつちまつてゐる。やが  
て、一番影に近い所にいた奴が、ふらつとよろけてそのままばつた  
り仰向けにひっくり返つちまつた。

そしてまたひとり、膝をついて前のめりに倒れ臥す。続いて二、  
三人が同時に。

人が倒れるにつれて、影が濃く暗くなつていくように見える。夕  
焼け空までがその闇に毒されて、不気味な色に変わつてゐた。

「ひ……」

誰かがかすれ声をもらした。それが引き金になつて、すさまじい  
悲鳴がいつせいに上がる。金切り声、泣き声、うろたえ怯えて助け  
を求める声。蜘蛛の子を散らすように、もう俺たちの事なんざ無視  
して、てんでに影から遠ざかるつと逃げて行く。

俺も弾かれたように走り出していた。格好悪いが、この際そんな  
こた言つてられねえ。

だが十歩も行かずに慌てて止まり、振り返つた。小僧も犬もつい  
て来ねえ！

「何やつてんだ馬鹿野郎！ 早く来い、逃げるんだ！」

ちくしょう、枯れ木じじいには怯まなかつたくせに、何で立ち往  
生しやがるんだよ。

「こつちを見ろつて！ 置いてくぞ、この愚図！」

地団駄踏んで喚く俺に一警もくれず、真理はやおら手をもたげ、  
パンと大きくひとつ柏手<sup>かしわで</sup>を打つた。澄んでよく通るその音が、影  
のもたらす嫌な空氣を、わずかに払いのけてくれた気がした。続け  
てもう一度。音に押されたように、影が歩みを止める。

「かけまくも畏き祓<sup>はらい</sup>処<sup>ど</sup>の大神等<sup>おおかみたち</sup>、よろずの枉事罪穢<sup>まがこと</sup>れを……」

真理が祝詞<sup>のりと</sup>を唱えだす。悠長なこと言つてて、本当に効き目があ

るんだれつな、おい。んな事してねえで逃げた方が賢いんじゃねえのか？

「はりいたまい清めたまえと……」

声が震えた。影がまた動きだしやがったのだ。そら見たことが！ もうあとほんの数歩しか離れてねえ。

「真理！ そいつは放つといて逃げる、祓おつなんざ考えるな！」 こっちが喉を嗄らして叫んでるつてのに、真理の奴は振り向きもしねえ。これだから聞き分けの悪い餓鬼は！ 白黒の一匹はもうびつたり真理の足にへばりついていて、役に立ちそうにねえ。

「えいくぞ、世話の焼ける！」

なんで俺がここまでしなきやならねえんだ、我ながら自分に腹が立つ！

俺は思い切つて駆け戻り、真理の腕をひつかんだ。同時に影がぬうつと津波のように大きく立ち上がる。

「逃げるわんこりども！」

無我夢中で俺は犬どもを蹴った。ギャンとも言わず、一匹は転がるよつに駆けて行く。影が落ちて俺たちを飲み込む寸前、何とか真理を思い切り突き飛ばしてやつた。

頭の上から影が覆いかぶさる。闇に包まれたと同時に、なぜか昔の記憶がでたらめに脳裏をよぎつた。弟と竹馬遊びをしたこと。おふくろの打ち掛け。親父の死にざま……

ああやれやれ、親子揃つて化け物にやられて頓死かよ。みつともねえなあ。

と、観念しかけたその時、

「やめろ！」

真理の絶叫が響くや、玻璃の碎けるよつな音がして、俺のまわりに数多の星が弾けた。

「うわっ！？ 何だ、こりやいつたい」

驚いて目をぱちくりさせたその瞬間に、星の光はもう消えてなくなつていた。ついでに、どうこうわけだか、影までも。

「……何だあ？」

往来に立ち済くしたまま、俺はぽかーんと口を開けてしまった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4558y/>

---

昏い道連れ

2011年11月27日20時55分発行